

---

水

siko

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水

### 【Nコード】

N3670A

### 【作者名】

s i k o

### 【あらすじ】

とても短いお話。人は皆選択をして毎日を生きる。僕も今日一つの選択をしたのかもしれない。その結末はどうなるのだろう・・・。

賽は投げられた。覆水盆に帰らず。こぼれたミルクは戻らない。  
うん。色々な言いかたがあるよね。

「あ……あの……私……」  
そうして僕もたった今自分でとった行動を後悔している。その一人だった。

「私は……その……」  
放課後に好きな女の子を呼び出して告白した。くそう……こんなことならしなけりゃ良かった。

「私は……」  
ああ……こんなに胸が痛い。しんどい。高校の合格発表なんか目じゃないね。

もういやだ。断られるんだろうか……断られるんだろうなあやっぱり。

だって彼女は可愛くて人気者で……僕みたいなじけたヤツとなんか見合っわけは無い。

ああ……もう聞きたくない。断られる所なんて。そうしてまだ答えも聞いていないのに自分がどんどん惨めになる。

そうして……

「あ……ちよつと……待ってッ！」  
気がついたら怖くなった僕は彼女の前から走って逃げ出していた。涙で前が見えない。ははは……まさか高校生にもなって泣くなんて思ってたな……

夜、家に帰った僕は暗い部屋でベッドの上でボーっとしていた。まさに覆水盆に帰らず。

なにやっつてんだろ・・・僕？

答えも聞かずに逃げちゃうなんて・・・なんか男として最低だなもつ。

せめて断られるにしてもちゃんと答え聞いてからならまだ・・・笑ってごめんって言って・・・明日からも普通にいられたのに。

そうするつもりだったのに・・・気が動転して・・・。

彼女怒ってるかな・・・怒ってるだろうな・・・呼び出しておいで逃げちゃうんだもん。

明日からどうやって彼女と顔合わせたら良いんだろう・・・学校に行く勇氣すらもつ持てない。

ああもつ・・・なんで告白なんかしたんだ僕の馬鹿！

あれ・・・そういえば僕はなんで告白しようと思っただっけ・・・

・・・？

あ・・・。

そう、あれは今日の昼の休みのことだ。僕は前から彼女が好きだったんだ。でも奥手だからなかなか話しかけられなくて・・・。

そんな時に彼女がカッコいい男と話して笑っているのが見えたんだ。それを見た僕は・・・なんだか胸が痛かったんだ。

さらにそのときに聞こえるクラスメートの話し声。

「あーあ、やっぱり彼女アイツと付き合ってるのかな・・・俺狙ってたのになー。」

「ああん？ お前じゃ見合わないって。」

「へへへ・・・まあそうだけどさ・・・あゝあ、もう彼女アイツとやったのかなあ。」

「ん・・・そりゃあやっただろうさ・・・羨ましーよなー。」  
「ん・・・あの胸なんかなかなか・・・。」

その話が聞こえてきた時・・・僕は彼女とその男が抱き合っている光景が目に見えたんだ。

好きな人の裸が妄想されても、不思議と興奮はしなかった。

むしろ気分が凄く悪くなって・・・モヤモヤして・・・いても立ってもいらなくなって・・・。

それでそのまま彼女に約束取り付けちゃったんだ・・・。

なんていうか・・・単純だな・・・僕。嫉妬に狂って告白して逃げて・・・最低。

ああ・・・なんだかもう・・・死にたいや。

・

「ふふっ・・・。」

「どうしたの・・・あなた？」

「いやあ、僕が君に始めて告白したときの事を思い出してさ・・・。」

「ああ・・・うふふ・・・あの時はびっくりしたわ。突然付き合ってくださいで返事する前に逃げちゃって・・・。」

「う・・・まあ思い出すと今でも恥ずかしいけど・・・。」

「あらそう？でももう十年にもなるのよね・・・。」

「うん。お願いがあるんだ。」

「なに？」

「キスして。」

「ふふふ・・・はい。」

まあそうして色々あつて彼女は僕の奥さんになった。

色々あつたつてそりゃあもう凄く色々あつたさ。

最終的には仲間を集めて魔王退治に出る所まで発展したんだなコレが。その結果七個の球を集めて・・・まあいいや。

とにかくそうして僕はめでたく彼女と結婚したつて訳。

賽は投げられて覆水は盆には帰らない。当たり前のこと。人生は戻らない。

でも、流れない水は腐る。取り合えず結果はどうあれやってみることが大事なんじゃないかな？

あの時もしも彼女に告白しなかったら僕の人生は全然違うものになつていたことになつただろう。

でもその時そうしたということは少なくともその時はそれが最善だつたつて言うこと。

ならばすべての過ぎていったことは必然。失敗も沢山あつた。でも・・・。

そうやってさまざまな選択から今の道を選んで僕は生きている。

もしその結果が悲しい物だつたとしてもその時それを最善だと自分が思っていたんならそれはきつと間違いじゃない。

だから僕は今まで間違つた選択をしたことは・・・無いんだ。

「あなたー、コーヒー入ったわよー？」

「ああ、ありがとう。今行く。」

だから僕は今日も生きている。  
いつか終わりが来る、その日まで。

(後書き)

後書きです

どうも。S i k oです。

少し暇つぶしに短編書いてみました。短いのは初めてです。

いやなんかね。こんなの書いてる暇あったらさっさと憐神更新しろっていう人いるかもしれませんが。

まあいたらそれはそれは嬉しいんですけど。

でも、コレを書くのには三十分位しかかかってません。だからいいかなって。

いや、ネタ考えててなんか無いかなーって思って頭カラカラ振ったらこんなんできて。

まあ載せるほどの話でもないかなーって思ったんですけど書いたから勿体無いし。

まあいいやってことで。

でもアレです。今回は書き方と言うか改行とかがいつもと違います。

本当は長編のほうもこういう風にしたいんですがもう書き始めちゃったので、いまさら戻せないんですよ。

それでは長々と蛇足すみませんでした。

これからもよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3670a/>

---

水

2010年10月28日07時54分発行